

現代能『春と修羅』上演と討議「宮沢賢治・能・現代芸術」

岡本 章

二〇一一年十月八日に、本研究所と文学部芸術学科が主催し、舞台上演と討議が白金校舎アートホールにおいて行われた。学内での舞台上演の試みは、本学学生に良質の舞台芸術の鑑賞の機会を与えるために積み重ねられてきたが、今回、錬肉工房により新作の現代能『春と修羅』が演じられ、また討議は、「宮沢賢治・能・現代芸術」と題されて活発に議論が交わされた。本文の筆者岡本は企画者として関わり、また現代能『春と修羅』公演の構成・演出に携わったが、以下、上演意図とその概要を簡潔に記しておきたい。

今回の上演作品『春と修羅』は、「現代能」と冠されているように、筆者が主宰する錬肉工房が、一九八九年から持続的に展開してきた「現代能楽集」の連作の十一作目にあたる。現代能『春と修羅』では、魅惑的な宮沢賢治の言語世界と能との関係性が実践的に探求された。そこで能を現代に開き、伝統と現代の諸課題を捉え返すために行われてきた、「現代能楽集」の作業の問題意識について、まず少し述べておきたい。

それは三点あり、その一つは、謡曲などの言語、テキスト・レヴェルだけではなく、能の演技や身体性、特に夢幻能の演技の持つ自在で深い存在感、関係性、それを支えている身体技法に注目し、対象化の作業を行うこと。そして二つ目は、そのため実際に能、狂言、囃子方などの演者の参加を得、共同作業を行い、その本質的な構造を浮き彫りにしていく。同時にその作業が「現在」に根差した、新鮮でラディカルな実験的な作業として息づくように模索していくということ。また三つ目としては、能以外の多様な芸術ジャンルの表現者との共同作業を行い、それが相互の手の内の技芸の寄せ集めの縮小再生産ではない、絶えず各ジャンルの根底のゼロ地点に戻っての、自在で「開かれた」新たな表現の、関係の場の探求となることを目指していくということであった。

さてところで、宮沢賢治の言語、作品世界には、これまでも関心があり、その舞台化の可能性を探る試演も錬肉工房では何度か行ってきた。私が賢治の言語宇宙に引き付けられてき

たのは、一つには、近代的自我意識を超えた、多層的な関係存在としての〈私〉の、身体性のあり方が存在し、そしてまた、生と死、過去と現在、虚構と現実が自在に、重層的に交錯する二重性の構造に注目するからである。そこではいつしか、生と死が、そして人間と動物たち、木や石や虹や月あかりたちが直接に交わり、戯れる豊饒な言語世界が浮かび上ってくる。これは思い起こしてみれば、能、特に夢幻能の劇的世界に深部で通底しているはずだ。

そのため今回の舞台では、宮沢賢治の物語世界の再現ではなく、詩集『春と修羅』を中心に、童話『かしはばやしの夜』、劇『饑餓陣営』、書簡、「農民芸術概論綱要」などの断片を岡本が再構成し、現代能として作品化を試みている。もちろんそれは、夢幻能の構造を図式的になぞるのではなく、万物全てが消失した廃墟、「無の場所」に、不思議に浮遊する、輪郭も形象も不明な靈魂がいつしか形を持ち、語り出す。それは賢治でも、妹のとし子でも、また様々な動物や植物、非業の死者たちの声でもあるだろう。

こうした重要ではあるが、困難な課題を達成するために、この試みでは、女性能楽師の鶴澤久氏、現代演劇の古屋和子、横田桂子の両氏の参加を得た。そして錬肉工房の女優陣とともに、女性の自在で生命感溢れる〈声〉や〈身体性〉を手掛りに、即興性を重んじながら、オノマトペ（擬音語、擬態語）に耳を澄ませ、死と再生を、魅惑的な賢治宇宙をくつきりと浮き彫りに

出来ればと目指された。

宮沢賢治は、一八九六年の三陸大地震、大津波の年に生まれ、一九三三年の三陸地方大地震、大津波の年に死んだ。その生涯の中で、人間、生命世界の相克の姿、冷害や凶作、貧困、戦争を見つめ、背負い格闘したが、東日本大地震の体験を経て、今回もう一度、その言語を深部で受け止め直し、身体化することで、少しでも鎮魂の思いに繋がっていく所があればとの思いでも上演された。

さて、終演後に行われた討議「宮沢賢治・能・現代芸術」では、本学教授長谷川一氏の司会で、出演者の能楽師鶴澤久氏、ストーリーテラーの古屋和子氏、俳優横田桂子氏、上演音楽の作曲で関わった本学准教授望月京氏と、岡本が出席し、公演の狙い、問題意識、意義がその具体的な舞台創造のプロセスを踏まえ語られた。その中から宮沢賢治の言語世界と、能、現代芸術との深い関わりが多面的な角度から照らし出された。また、それぞれのジャンルで、女性の表現者として果敢に挑戦し活躍する先達の言葉に熱心に耳を傾け、大きな励みと示唆を受けている学生の姿が印象的であった。

以下、掲載されるのは、現代能『春と修羅』の上演台本である。本作品は、十月の아트ホール公演を経て、さらに手を加え、稽古を重ね、二〇一二年三月に赤坂RED/THERRで決定版が上演された。ここに掲載されるのはその折のものである。

現代能『春と修羅』

テキスト
宮沢賢治
構成
岡本章

1

暗闇――。

廃墟、或いは「無の場所」。

いつの間にか、大地の底から響いてくる、死者たちへの鎮魂の声。
クロスが浮かび上る。

――おおおおお おおおおお

おおおおお おおおおお

気がつくつと、水の音。

身体の深部からオノマトペが発語され、交錯していく。

——ポッシヤリ ポッシヤリ

ポッシヤリ ポッシヤリ

ポッシヤン ポッシヤン

ポッシヤン ポッシヤン

ポッシヤリ ポッシヤン ポッシヤリ ポッシヤン

——ばるこく ばららげ ぶらんど

らあめていんぐりかるらつかんの
ぶらんどぶらんど

らあめていんぐりかるらつかんの
さんのさんのさんの

らあめていんぐりらめっさんの
かんのかんのかんの

だるだるびいとり だるだるびいろ

——

クロス、ゆっくりと立ち上り、互いに自在に間合いを計り合い

ながら、語り、動いていく。

——ポッシヤリ ポッシヤリ ツイツイ、トン

はやしのなかにふる霧は
あり
蟻のお手玉、三角帽子の、一寸法師のちひさなけまり

——ポツシヤリ ポツシヤリ ツイツイトン

はやしのなかにふる霧は

くぬぎのくろい実、柏かしはの、かたい実のつめたいおち、

——ポツシヤリ ポツシヤリ ツイツイツイ

はやしのなかにふるきりの

つぶはだんだん大きくなり

いまはしづくがポタリ

——こざる こざる

おまへのこしかけぬれてるぞ

霧 ぼつしやん ぼつしやん ぼつしやん

おまへのこしかけくされるぞ

——うこんしやつぼのカンカラカンのカアン

あかいしやつぼのカンカラカンのカアン

——くるみはみどりのきんいろ、な

風にふかれて すいすいすい

くるみはみどりの天狗てんぐのあふぎ

風にふかれて　ばらんばらんばらん
くるみはみどりのきんいろ、な
風にふかれて　さんさんさん

——のろづきおほん　のろづきおほん

おほん、おほん

ごぎのごぎのおほん

おほん、おほん

——うさぎのみ、はながいけど

うまのみ、よりながくない

——きつね、こんこん、きつねのこ

月よにしつぽが燃えだした

——一とうしやうは　白金メタル

二とうしやうは　きんいろメタル

三とうしやうは　すゐぎんメタル

四とうしやうは　ニツケルメタル

五とうしやうは　とたんのメタル

六とうしやうは　にせがねメタル

七とうしやうは　なまりのメタル

八とうしやうは　ぶりきのメタル

九とうしやうは マツチのメタル
十とうしやうから百とうしやうまで
あるやらないやらわからぬメタル

—— からすかんざゑもんは

くろいあたまをくうらりくらり

とんびとうざゑもんは

あぶら一升でとうろりとろり

そのくらやみはふくろふの

いさみにいさむもの、ふが

み、ずをつかむときなるぞ

ねとりを襲ふときなるぞ

—— こよひあなたは ときいろの

むかしのきもの つけなさる

かしはばやしの このよひは

なつのをどりの だいさんや

やがてあなたは みづいろの

けふのきものを つけなさる

かしはばやしの よろこびは

あなたのそらに かゝるまゝ

語りの高まりの中、クロス舞台中央に。
音楽、次第に身に沁み入るように響いていく。

——そら ね ごらん

むかふに霧にぬれてゐる

草きくさのかたちのちひさな林があるだらう

あすこのところへ

わたくしのかんがへが

ずるぶんはやく流れて行つて

みんな

溶け込んでゐるのだよ

こゝいらはふきの花でいつばいだ

——ゆふべは柏ばやしの月あかりのなか

けさはすずらんの花のむらがりなかで

なんべんわたくしはその名を呼び

またたれともわからない声が

人のない野原のはてからこたへてきて

わたくしを嘲笑したることか

——こいつはもう

あんまり明るい高級ハイグレードの霧です

白樺も芽をふき

からすむぎも

農舎の屋根も

馬もなにもかも

光りすぎてまぶしくて

(よくおわかりのことです)

ひび日射しのなかの青と金

ラリック落葉松は

たしかとどまつに似て居ります)

まぶし過ぎて

空気さへすこし痛いくらいです

——わたくしが一あし林のなかにはひったばかりで

こんなにはげしく

こんなは一そうはげしく

まるでにはか雨のやうになくのは

何といふをかしなやつらだらう

ここは大きなひばの林で

そのまつ黒ないちいちの枝から

あちこち空のきれぎれが

いろいろにふるへたり呼吸したり

云はばあらゆる年代の

光の目録カタログを送ってくる

……鳥があんまりさわぐので

私はほんやり立ってゐる……

——みちはほのじろく向ふへながれ

一つの木立の窪みから

赤く濁った火星がのぼり

鳥は二羽だけいつかこっそりやって来て

何か冴え冴え軋って行つた

あ、風が吹いてあたたかさや銀の分子^{モリキル}

あらゆる四面体の感觸を送り

蛍が一そう乱れて飛べば

鳥は雨よりしげくなき

わたくしは死んだ妹の声を

林のはてのはてからきく

溶暗——。



2

静かな透明感のある音楽。

クロスの中から一人の演劇者が浮かび上る。

——きみにならびて野にたてば

風きらかに吹ききたり

柏ばやしをとろろかし

枯葉を雪にまろばしぬ

げにもひかりの群青や

山のけむりのこなたにも

鳥はその巢やつくろはん

ちぎれの艸をついばみぬ

——たしかにあいつはじぶんのまはりの

眼にははつきりみえてゐる

なつかしいひとたちの声をきかなかつた

にはかに呼吸がとまり脈がうたなくなり

それからわたくしがはしつて行つたとき
あのきれいな眼が

なにかを索めるやうに空しくうごいてゐた
それはもうわたくしたちの空間を二度と見なかつた

それからあとであいつはなにを感じたらう

それはまだおれたちの世界の幻視をみ

おれたちのせかいの幻聴をきいたらう

わたくしがその耳もとで

遠いところから声をとつてきて

そらや愛やりんごや風 すべて of 勢力のたのしい根源

万象同帰のそのいみじい生物の名を

ちからいつばいちからいつばい叫んだとき

あいつは二へんうなづくやうに息をした

白い尖つたあごや頬がゆすれて

ちひさいときよくおどけたときにしたやうな

あんな偶然な顔つきにみえた

けれどもたしかにうなづいた

——
にじはなみだち

きらめきは織る

ひかりのをかの

このさびしさ

こほりのそのの
めくらのさかな
ひかりのをかの
このさびしさ

たそがれぐもの
さすらひの鳥
ひかりのをかの
このさびしさ

——ほんたうにそんなことはない
かへつてここはなつののはらの
ちひさな白い花の匂でいっぱいだから
ただわたくしはそれをいま言へないのだ
わたくしのかなしさうな眼をしてゐるのは
わたくしのふたつのこころをみつめてゐるためだ
ああそんなに
かなしく眼をそらしてはいけない

もう一人の演戯者登場。

——風景はなみだにゆすれ

——あらゆる透明な幽霊の複合体

——かげらふの波と白い偏光

——ひかりはたもち その電燈は失はれ

——気層いよいよすみわたり

——ひのきもしんと天に立つころ

——すべてわたくしと明滅し

——みんなが同時に感ずるもの

——かなしみは青々ふかく

——すべてがわたくしの中のみんなであるやうに

——みんなのおのおののなかのすべてですから

——いつしか二人の対話がはじまる。

——ギルちゃんまつさをになつてすわつてゐたよ

——こおんなにして眼は大きくあいてたけど

——ぼくたちのことはまるでみえないやうだつたよ

——ナーガラがね 眼をじつとこんなに赤くして

だんだん環をちひさくしたよ　こんなに

――し　環をお切り　そら　手を出して

――ギルちゃん青くてすきとほるやうだつたよ

――鳥がね　たくさんたねまきのときのやうに

ばあつと空を通つたの

でもギルちゃんだまつてゐたよ

――お日さまあんまり変に飴いろだつたわねえ

――ギルちゃんちつともぼくたちのことみないんだもの

ぼくほんたうにつらかつた

――さつきおもだかのとこであんまりはしやいでたねえ

――どうしてギルちゃんぼくたちのことみなかつたらう

忘れたらうかあんなにいつしよにあそんだのに

さらにもう一人登場し、加わっていく。

――バンス　ガンス　アガンス！

ヘツケル博士！

わたくしがあるのでありがたい証明の

任にあたつてもよろしうございます

――やあ　こんにちは

――いや　い、おてんきですな

――どちらへ　ごさんぽですか

なるほど ふんふん ときにさくじつ
ゾンネンタールが没なくなつたさうですが
おききでしたか

——い、え ちつとも

ゾンネンタールと はてな

——りんごが中あたつたのださうです

——りんご ああ なるほど

それはあすこにみえるりんごでせう

——金皮のまゝ、たべたのです

——そいつはおきのどくでした

はやく王水をのませたらよかつたでせう

——王水 口をわつてですか

ふんふん なるほど

——いや王水はいけません

やつぱりいけません

死ぬよりしかたなかつたでせう

うんめいですな

せつりですな

あなたとはご親類でもいらつしやいますか

——え、え、 もうごくごく遠いしんるゐで

——バンス！ ガンス！ アガンス！

——かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほど、けつこです。
あした、めんどなさいばんしますから、おいでんなさい。
とびどくもたないでくなさい。

——お交わりはありませんか。

兵營には外から考へられない様な辛いことも多いでせう
保坂志願兵はもう馬にはよく乗れますか 重い堅い四角な
荷物をみんなに負けずにかつげますか。私はこのごろまた
をかしななりをしてプランプランと東京のある坂を下りな
がらまじめな兵隊さんだちに行き遭ひそのなかに保坂志願
兵も堅くたづなを握つて行くさまを考へて泣きさうになり
ました。無いことを考へてひとりでわらったり泣いたりは
をかしいやうですが私のやうな生活ではさうなりますよ。
いかにもいまがわれ には大じな場合なやうです。
まづはごきげんよう。

——御便りありがたう存じます。

お交りもなく何とも結構に存じます。
今度の巴里の会議では、その島はこのまま日本に止まるこ
とは勿論でせう。

私は暗い生活をしてゐます。うすくらがりのなかで遙に青
空をのぞみ、飛びたちもがきかなしんでゐます。

あなたが感ずる様に暗黒の時代は近いかもしれませぬ。

その暗黒のただなかをまっすぐに通り抜け、かがやきの国に立ってふりかへって暗黒の国の壁を破るひとはあなたの様にめまひのする様なはげしいところで力をつくりあげるのでせう。

——暫らく御無沙汰いたしました。お赦して下さい。……しきりに書いて居ります。書いて居ります。お目にかけてくも思ひます。愛国婦人といふ雑誌にやつと童話が一二篇出ました。一向いけません。学校で文芸を主張して居ります。芝居やをどりを主張して居ります。けむたがられて居ります。笑はれて居ります。授業がまづいので生徒にいやがられて居ります。春になったらいらっしやいませんか。関さんも来ますからさよなら。

——寒さも少しですが変りはありませんか。一月の休みには見えるかと思つてオルガンの本上げないで居りましたが三月は来れますか。わたくしすつかり療つて仕事して居ります。命を一つ拾つたやうな訳です。無理をなさらないやうにして下さい。もし三月来られるなら栗の木についたやどりぎを二三枝とつてきてくれませんか。近くにあらうたら。

三人の演戯者が浮かび上り、次第に暗くなつていく。



3

対面するクロス。中央に一人。

無音。

緊張感のある深い集中で、いつどこで動いたかが分らない緩慢な速度で歩んでくる。

——いさをかゞやく バナナン軍

マルトン原に たむろせど

荒さびし山河の すべもなく

饑餓の 陣営 日にわたり

夜をもこむれば つはものの

ダムダム弾や 葡萄弾ぶどう

毒瓦斯どくガスタンクは 恐れねど

うゑとつかれを いかにせん。

——一時半なのにどうしたのだらう。

バナナン大将はまだやってこない

ストマクウヲツチ
胃時計はもう十時なのに
バナナン大將は帰らない。

——もう二時なのにどうしたのだらう、
バナナン大將はまだ来てゐない
ストマクウヲツチはもう十時なのに
バナナン大將は帰らない。

——糧食はなし 四月の寒さ
ストマクウヲツチももうめちやめちやだ。

——どうしたのだらう、バナナン大將
もう一遍だけ 見て来よう。

——もう四時なのにどうしたのだらう、
バナナン大將はまだ来てゐない
もう四時なのにどうしたのだらう。
バナナン大將は帰らない。

——もう四時半なのにどうしたのだらう、
バナナン大將はまだ来てゐない
もう五時なのにどうしたのだらう
バナナン大將は 帰らない。

——大将ひとりでどこかの並木の
苹果りんごを叩たたいてゐるかもしれない
大将いまごろどこかのはたけで
人蔘じんじんカリガリ 噛かんでるぞ。

——七時半なのにどうしたのだらう
バナナン大将はまだ来てゐない
七時半なのにどうしたのだらう
バナナン大将は 帰らない。

——もう八時なのにどうしたのだらう
バナナン大将は まだ来てゐない。
もう八時なのにどうしたのだらう
バナナン大将は 帰らない。

——いくさで死ぬならあきらめもするが
いまごろ餓うえて死うにたくはない
あゝたゞひときれこの世のなごりに
バナナかなにかを 食くひたいな。

いつの間にか音楽。

演戯者、中央に近付き正面に向きを変える。



集中、緊張感が増し、コロスの語りが昂揚する。

——やむなく食^はみし 將軍の

かゝやきわたる 勲章と

ひかりまばゆき エボレット

そのまがつみは 録^しされぬ。

——饑餓陣營のたそがれの中

犯せる罪はいつも深し

あゝ夜のそらの青き火もて

われらがつみをきよめたまへ。

——マルトン原のかなしみのなか

ひかりはつちにうづもれぬ

あゝみめぐみのあめを下し

われらがつみをゆるしたまへ。

——あゝ、みめぐみの雨をくだし

われらがつみをゆるしたまへ。

——いさをかゝやく バナナン軍

マルトン原に たむろせど

荒^すさびし山河の すべもなく

饑餓の陣営 日にわたり

夜をもこむれば つはもの

ダムダム弾や 葡萄弾

毒瓦斯タンクは 恐れねど

うゑとつかれを いかにせん。

音楽、語りが高まっていく。

溶暗——。

4

緊張感のある音楽。

薄闇の中、気迫のこもった激しい足踏み。

強度と身体性のある声、動き。

足踏みが次第に高まっていく。

——dah - dah - dah - dah - dah - sko - dah - dah - dah

dah - dah - sko - dah - dah

Ho! Ho! Ho!
 dah - dah - dah - dah - dah - sko - dah - dah
 dah - dah - dah - dahh
 dah - dah - dah - dah - dah - sko - dah - dah
 Ho! Ho! Ho!

— 丁 丁 丁 丁 丁
 丁 丁 丁 丁 丁
 丁 丁 丁 丁 丁
 丁 丁 丁 丁 丁

— 尊々殺々殺
 殺々尊々々
 尊々殺々殺
 殺々尊々尊

— to - té - to - to
 to - té - te - to - té - to - to
 tí - tí - tí - tí - tí - tí
 to - té - to - to
 to - té - te - to - té - to - to
 tí - tí - tí - tí - tí - tí

強度のある語りと、激しい足踏み、オノマトペの断片が絡みあい、響き合っていく中、クロス、渦巻くように中央に引き寄せられる。

——定期の集りを、十二月一日の午後一時から四時まで、協会が開きます。日も短しどなたもまだ忙がしいのですから、お出でならば必ず一時までにねがひます。弁当をもつてきて、こっちでたべるもいいでせう。

——髪を長くしコーヒーを呑み空虚に待てる顔つきを見よ

——詞は詩であり 動作は舞踊 音は天楽 四方はかがやく風景画

——四次感覚は静芸術に流動を容る

——冬間製作品分担の協議

製作品、種苗等交換売買の予約

新入会員に就ての協議

持寄競売……本、絵葉書、楽器、レコード、農具

——われらに要るものは銀河を包む透明な意思 巨きな力と熱

である

——風とゆききし 雲からエネルギーをとれ

——十一月廿九日午前九時から

われわれはどんな方法でわれわれに必要な科学を

われわれのものにできるか 一時間

われわれに必要な化学の骨組み 二時間

——dah - dah - dah - dah - dah - sko - dah - dah

Hoi Hoi Hoi

——to - té - te - to - té - to - to

ú - ú - ú - ú - ú - ú

—— 丁丁丁丁丁

丁丁丁丁丁

叩きつけられてゐる 丁

叩きつけられてゐる 丁

藻でまっくらな 丁丁丁

塩の海 丁丁丁丁丁

熱 丁丁丁丁丁

熱 熱 丁丁丁

(尊々殺々殺)

殺々尊々々

尊々殺々殺

殺々尊々尊)

ゲニイめたうとう本音を出した

やってみろ 丁丁丁

きさまなんかにまけるかよ

何か巨きな鳥の影

ふう 丁丁丁

海は青じろく明け 丁

もうもうあがる蒸気のなかに

香ばしく息づいて泛ぶ

巨きな花の蕾がある

緊張感のある音楽、激しい足踏み、オノマトペの断片、
解体された言語の語りの渦が、高まりの極に達した時、
突然、クロス、砕け散るようにくずおれ、大地に伏す。

溶暗――。

5

静かな透明感のある音楽。
クロス全員が薄闇の中、浮かび上がる。

——風景はなみだにゆすれ

——あらゆる透明な幽霊の複合体

——かげらふの波と白い偏光

——ひかりはたもち その電燈は失はれ

——気層いよいよすみわたり

ひのきもしんと天に立つころ

——すべてわたくしと明滅し

みんなが同時に感ずるもの

——かなしみは青々ふかく

——すべてがわたくしの中のみんなであるやうに
みんなのおおのなかのすべてですから

音楽が高まり、虚空に響き、ゆつくりと消えていく。

溶暗——。

引用文献

宮澤賢治詩集「春と修羅」、「春と修羅第二集」、「文語詩稿」、
「疾中」、童話「かしはばやし之夜」、「十力の金剛石」、劇「饑
餓陣営」、「種山ヶ原の夜」、書簡、「農民芸術概論綱要」、他

写真撮影・宮内勝